

BUSINESS

リーダーになる!

実践する上司学。
嶋津良智による、よきリーダー、上司になるための必読コラム。



嶋津良智 ■リーダーズアカデミー学長。早稲田大学講師。大学卒業後、IT系ベンチャー企業に入社、トップセールスマンとなり、24歳で最年少営業部長に就任。1993年に独立、起業。94年に共同で情報通信機器販売の新会社を設立。2004年にIPOを果たす。05年に教育機関、「リーダーズアカデミー」を設立。

第51回 個人面談の効果

上司に赴任した直後は、部下の一人一人と個人面談する絶好の機会。「対二」だからこそ円滑にコミュニケーションが取れます。

初期に行く意味
「対二」の利点

新しい上司として赴任したとき、最初に考えなければならぬのは、部下とのコミュニケーションです。もちろん、仕事をしながらゆつくりと信頼関係を築いていくというタイプの人もいます。ですが、わたしは最初の段階で全員の部下と個人面談することをオススメします。通常業務の中では、すべ

ての部下と個人的に話をする機会というのは、そうそう取れるものではありません。部下としても、みんなと一緒に仕事をする中では、なかなか言い出せないことも、一対一で話してみると意外とすんなりと話してくれることもあります。赴任したばかりというのは、部下全員と個人面談をする絶好の機会だということとを、ぜひ覚えておいてください。そして実行してみてください。

一般的に、上司になる場合、まったく知らない部門(部下たち)の上司になるパターンと、もともと一緒に仕事をしていたメンバーの長に任命されるというパターンがあります。

時間と体力をかける
組織作りの第一歩

前者の場合ならば、最初に個人面談をすることは不可欠だと思います。おそらく、部下の名前と顔も一致しない状況でしょうし、上司であるあなた自身の情報もまったく伝わっていません。まったく知らない者同士が仕事をするのは、何かと不自由もあるのは

です。その点、個人面談をしておけば、多少の人間関係が築けた段階から、スタートすることができま

す。一方、一緒に仕事をしてきたメンバーの長になった場合でも、個人面談をした方がいいとわたしは考えます。上司として接するからには、少なくとも仕事上の関係は今までは違ってきた。その部分をしっかりと確認しておかないと、ある人は、課長になって変わってしまった「なんて誤解を生み、信頼を失うなんてことにもなりかねないのです。忙しい中で、全員と個人面談するのは時間的にも、体力的にもかなりの負



担だとは思いますが、組織づくりの第一歩なので、ぜひ試してみてください。『上司のルール』より転載)